出会いと発見から見えてきた私と岩手の「幸福」

村上　皓成

私にとっての「幸福」とは、愛する人やものが「幸福」であることです。母の実家がきっかけで岩手が大好きな場所になった私は、将来この故郷の「幸福」のために働きたい、という夢を持っています。

私の母の実家は一関市厳美町の本寺地区にあります。市街地にある私の家からは車で20分程の距離のため、幼い頃は休日によく両親に連れて行ってもらっていました。

当時の私にとって本寺は、祖父母の家がある場所、田んぼがいっぱいの場所程度の印象しかありませんでした。が、中学１年の時に祖父から、この本寺地区がかつては「骨寺村」という場所で、沢山の田んぼが昔からずっと変わらずに残されてきたものであること、世界遺産登録には至らなかったものの、歴史ある平泉と縁のある非常に価値ある土地であることを教えてもらいました。このことをきっかけに、私は本寺の歴史について調べるとともに、伝統行事である「米納め」に参加し、「本寺神楽」を実際に見るなどして、より本寺という場所が好きになりました。そして、この地を多くの人に知ってほしいと考えるようになりました。しかし同じ一関市内に住んでいる友人でも、本寺を知らないという人は少なくなかったのです。

実はこういったことは私の周り、そして本寺に限った話ではありません。以前と比べて核家族が増えたため、地域の文化や歴史を多く知るお年寄りと関わる機会が減ったことなどから、その地域に住んでいても文化や伝統を深く知らない、あるいは関わっていない、という人が多いのです。この場合、地域から外部へと魅力を発信していくことは難しいでしょう。

現在、岩手の県南地区は、中尊寺金色堂の世界遺産登録や北上山地の国際リニアコライダー計画により、国内のみならず海外からも注目を集める存在となっています。私も先日、知り合いのインド人に平泉を案内した際、外国人観光客の姿を多く見かけました。こうした地元の話題の種は、多くの人が岩手に関心を持ち、訪問する絶好の機会となるはずです。そして、チャンスをものにするためには、地元の人の協力が必要不可欠です。

本寺を例に挙げると、地域住民がスタッフとして働く「骨寺村松園遺跡交流館」があります。そこでは本寺の歴史を映像や展示で紹介するだけでなく、地元の人が育てた農作物や手作りの手芸品を販売するブースが設けられ、観光客と地域住民との交流の場があります。訪れた土地で実際にそこに住む人たちと関わる機会というのは、土地の魅力を知ってもらう上で非常に大きな力を持つと考えます。

本寺を含めた県南の観光地では、パンフレットの多言語化や旅行客の受け入れ施設の整備など、各地からの観光客を迎える態勢が整いつつあります。しかしそれはあくまで外的な部分です。内的な部分である、実際に岩手の魅力を伝えていく側である私達は、まだまだ不完全なのかもしれません。大切なことは、まず岩手に住む私たち自身がこの故郷についてよく知ること、そして岩手を訪れた人達に故郷の魅力を伝えていくことだと考えます。

一関市を例にしても、本寺だけでなく「大原の水かけ祭り」「川崎の布佐神楽」など、私が知るだけでも魅力的な文化が沢山あります。そしてそこには、文化を守ろうとする熱い思いを持った人がいます。本寺の文化を大切にする祖父の存在や、川崎地区で布佐神楽をしている友人との出会いから、私は、祖父が講師を務めている本寺地区神楽の伝承者になろうと決意しました。本寺地区神楽とその魅力を、まずは私の身近な友人や県南地区に住む人たちに伝えていきます。そして10年後の将来、岩手県庁で働き、岩手と国際社会とを繋ぐ人材となって、大好きな故郷岩手の文化を、他の地域や国に発信する仕事をしていたいです。今後の岩手県が多くの人に認知され、各地から多くの人が訪れる場所となり活性化していくことが、次世代を担う私達の「幸福」に繋がると信じ、行動していきます。